

VITALITE インタビュー

スーパー 超システムとしての生命、 そして人間

東京大学医学部教授 多田富雄

聞き手：佐多保彦 株式会社 東機質 代表取締役社長

佐多：先生はお能に造詣が深く、昨年も新作のお能を発表されたそうですね。

多田：一番新しいものは『望恨歌』といまして、強制連行のために残され年老いた、朝鮮人妻の悲哀を描いたものです。私がお能に興味を持ち、鼓を打つようになったのは、もう40年も前になります。4年前に初めて書いた新作能『無明の井』は、この3月末から4月にかけて、アメリカのクリーヴランド、ピッツバーグ、ニューヨークなどで上演されることになっています。

佐多：それが、脳死移植をテーマにしているお能ですね。

多田：ええ。私は別に脳死移植に反対というわけではありません。ただ、脳死議論が、臓器をどう利用するか、それにはどんな手続きが必要かという、あまりにも機械論的な、法律論的ななされ方だったように思いました。人間の「死」というのは、直覚的なものを含む日本人の死生観を抜きにしては考えられないということ、死者の側から」というかたちで問題提起したかったのです。

史書『列子』湯問編(B.C.250年ころ)に、扁鵲という医師が心臓移植をする話が出てきます。私はこれにヒントを得ました。苦しみながら生命を争い、そうやって生き永らえることにどんな意味があるのかと思い悩む女。脳死で心臓を摘出されて、「われは死にびとか、生きびとか」と呻吟い、脳死後の長い時間について物語る男。そのようなお能です。

佐多：私共の会社では人工呼吸器を作っています。これがなければ、脳死もなかったわけです。

多田：脳は死んでいても、身体は生きているから、移植ができるわけです。「いずれは死ぬ」という言い方では、これまでの伝統的な死生観からみれば、大きな抵抗があるのが当然です。あえて決断をするのですから、いっさいの便宜的なごまかしなしに、きちんと議論すべきです。これから、尊厳死とか終末期医療などに関連して、「積極的に生命を断つ」医療の場面が次々と出て来ると思いますよ。その時にどうするかということも含めてです。



ただ・とみお

1934年、茨城県生まれ。59年、千葉大学医学部卒業。千葉大学医学部教授を経て、現在、東京大学医学部教授。専攻は免疫学。エミール・フォン・ペーリング賞、朝日賞、大仏次郎賞を受賞。著書に、『現代免疫学』、『生と死の様式』（共著）、『イタリアの旅から』、『免疫の意味論』など多数。

生命をもつ個体の内部では、次々と細胞が死に、再生し続けています。個体の生命とは、構成要素である細胞の総和などではなく、「自己同一性」に裏付けられた「^{スーパー}超システム」の活動として理解しなくてはならないと私は思っています。個体の死もまた、各部分の死の総和ではなく、「自己同一性」の回復の可能性が断たれ崩壊してゆく長い過程、それが死です。

佐多：お能を含め、いわば東洋的な思想を、欧米の医学者、科学者はどのように理解されるのでしょうか。

多田：『免疫の意味論』（93年大仏賞受賞）にしても、面白いストーリーだからこれを翻訳しようという意見と、反対という意見が、半々らしいですよ。日本はこれまで技術的な側面だけで評価されてきた歴史があるからでしょうね。

免疫学はとてもおもしろい学問なのですが、実際の研究対象は、非常に細分化されてしまって、それ自身ではあまり意味がないような、分子とか遺伝子の断片とかになってしまっています。しかし本来の目的は、「自己とは何か」とか、「個体の生命とは何か」を考えているんです。ですから、極端に細かいものを見る目と同時に、全体を見る目というものが必要なんです。そこには、西洋が発見した見方の他に、



新作『無明の井』の舞台より

もう少しファジーな東洋的な考え方もあるわけですね。免疫は実に、曖昧で冗長な混沌たる「^{スーパー}超システム」です。

科学技術や機械開発だけでなく、科学的な知の世界というようなものに、そろそろ日本人も参加しなければならないと思います。

佐多:生命とは、機械的なものではなく、本来もっと多様なものなんでしょうね。

多田:そのとおりです。今まで生物学者は決定論的な立場を取ってきました。例えば、インシュリンのレセプター。インシュリンの結合によって、すべての細胞は一樣にインシュリンに依存した代謝を始める。そこまではそのとおりですが、免疫学ではそれとは違う場合もあるのです。T細胞が抗原を認識すると、その細胞は反応して増殖する。これが従来の考え方です。ところが、実際は増殖をやめてしまう場合もあれば、サイカイなどの活性物質を作る場合、それを作らない場合、さらには認識したことによって細胞が自殺してしまう場合すらあります。反応しない場合には、すぐに認識できなかったからと思われがちだが、実際は認識したからこそ反応をやめてしまうのです。

つまり細胞は、ある刺激について、ひとつの決められたことをやるのではなくて、いろんなオプションを持っていて、その中からひとつを選ぶ。それは環境の条件次第なのです。

佐多:ひとつひとつの細胞が、ひとりひとりの人間みたいに判断しているということですか。

多田:人間も、あるショックが与えられると、非常に活性化されるひともいれば、自殺してしまう人もいますね。細胞でも同じように条件次第というところが、生物のすごいところですよ。

これは私の生命論にも関わるんですが、先程も少し触れたように、私は「超システム」という考え方を提出しようと思っているんです。「システム」というのは、多様な要素があっ

て、その要素の関係によって動いている集合体ですね。「超システム」は、その多様な要素を自分で作り出す。さらに作り出した自分に適応するような要素を新しく作り出す。外界との関係によって適応を重ねて重層化してゆく。そのようにして、自分で自分を組織化して運営するシステムなんです。

他に超システムの例をあげますと、受精卵からの個体発生です。遺伝子で決定されていることを超えて、偶然性というものを採りこみながら、自己変容し自己組織化し続けます。それから、脳神経系。個性や思考様式の形成は超システムの最右翼です。きんさんとぎんさんは一卵性双生児ですから、遺伝子は同じですね。でも性格や行動様式は今く違うのです。どうして、利己的DNAでは決定されないものが出てくるかという、それは、生命が超システムだからだと思えるのです。

それから言語の生成過程です。ネアンデルタール人がはじめに、「アー」とか「ウー」とか発したものが、どんどん複雑になって行って、アルファベットができ、文法ができていく。あらゆるものを表現できるようになる。それが、ある日突然消えてしまうこともある。エジプトの古代文字のように、誰も読めなくなって、何世紀後かにロゼッタストーンのようなものが発見されて再び読めるようになる。DNAと同じですね。いつかは、人間のDNAが全部読まれるようになるでしょうが、その時超システムを作り出す機構がわかってくるでしょう。

更に大都市の成立・発展。貨幣経済。多国籍企業、多民族国家、なども一種の超システムです。もっとも、そこまで来ますと、大袈裟で誇大妄想的と言われそうですが(笑)。

佐多:先生は、非常に多くのものに興味をお持ちとお見受けしますが。

多田:自分でも怖くなる時があります(笑)。イタリアが好きで言葉から勉強したり(92年『イタリアの旅から』誠信書房刊)、今はベルシア絨たんと唐辛子に凝って困っています。

NEW TECHNOLOGY

動物用IVF (in vitro fertilization) の近況

桑山 正成

くわやま・まさしげ

1962年、大阪生まれ。85年麻布大学獣医学部卒業。農水省畜産試験場・依頼研究員としてウシ卵子の体外受精を研究。88年より社団法人家畜改良事業団・家畜バイオセンター技師。



中生代ジュラ紀(約2億年前)の恐竜の血を吸った蚊が、琥珀の中に閉じ込められていた。その血液の成分を解析し、DNAがつきとめられたら、ティラノザウルスやブラキオザウルスがこの世に再生される。——これは『ジュラシックパーク』のフィクションだ。

しかしいま、全く同じ遺伝子をもつ複数のクローンガエル、鎌型赤血球貧血症のモデルマウス、インターフェロンや血栓溶解剤をつくる大腸菌、羊毛を増産するトランスジェニックシープなどなど、SFのような話が現実となっているようだ。

それらの中で私達にとって最も身近なのが、水産・畜産における発生工学に関する技術だろう。鮭の人工授精はよく聞かすが、松坂牛や近江牛、乳牛ホルスタインも99.9%が人工授精だ。優秀な遺伝形質(人間にとって)をいかにして大量に市場に供給するか。極めて合理的に、そして加速度的に技術は革新している。

そこで、今回は(社)家畜改良事業団・家畜バイオセンターの桑山技師に、その具体的なお話をうかがった。

——人工受精だけでなく、近年は体外受精を利用した受精卵移植も増えているそうですね。

桑山：そうです。まず屠殺された牛から卵巣を採ります。卵巣から卵子を吸引し、メEDIUMで培養すると24時間で成熟します。精子と結合できる状態になったら、凍結精子をとかして卵にかけてやります。受精すると二分割、四分割、八分割と進み、六回分裂した時点で胚盤胞という段階に来ます。細胞数は64個以上で、やがて胎盤になる栄養膜細胞と、

胎児になっていく内部細胞塊との2種類の細胞群に分かれる時です。これは体内で言えば、受精卵が卵管から子宮に降りて来る段階なのです。ここで試験管から出して、牛の子宮に入れてやります。これが体外受精卵の移植です。

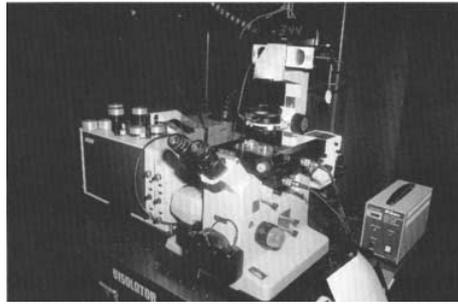
——仔牛の父親は、どこにいるのでしょうか。

桑山：遺伝的に選抜された最高に優秀な牡牛が、この家畜事業団でも飼われています。1回の採精で、精液約6cc(精子数約50億)から人工授精用のストローが100本できます。1年間に100回採精すると、10000本の凍結精液ができるわけですね。ですから、牡牛は牝牛の一万分の一頭で足りることになります。厳しい世界ですね(苦笑)。

農家で飼われているホルスタインに黒毛和牛の受精卵を入れて、将来的には何百万円にもなる仔牛を生まれ、かつ牛乳を出してもらおうというわけです。

——未成熟卵子から、最終的に仔牛になる率はどの位ですか。

桑山：1個の卵巣から、だいたい10個の未成熟卵子がとれます。受精率は95%程度ですが、胚盤胞にまでいくのは40%位。このなかには品質の良いものも悪いものも含まれていて、凍結融解後の生存率はAランクで90%、Bランクで70%、Cランクで30%。こうして実際に使えるのは4個に1個です。最終的にはこれを凍結させると半永久的に保存でき、好きな時に欲しいだけお湯に溶かすだけでOKというわけです。東京食肉市場では年間2万頭以上の和牛が屠殺され、1頭の牝牛には卵巣が2個ありますから、2万個以上の卵巣が入手できるので、受精卵がざつ



レーザー顕微鏡

受精卵は液体窒素で凍結される

と2万個とれる計算になります。

この技術ができたのが1985年。今から9年前に農水省・畜産試験場の花田博士が世界で始めて成功されました。それまでは、死んだ牛の卵巣など受精するはずがないというのが世界的な常識だったのです。体外受精は日本の技術です。

ところで88年頃オランダで、生きた牛の卵巣から卵子を吸引するという試みがなされました。優秀な資質をもつ牝牛から反復して卵子を採取し、これを体外受精のラインにのせようというわけです。ドイツの畜産試験場のデータによりますと、吸引後48時間でちゃんと再生するので、2日ごとに1回につき10個ずつ2か月吸い続けても変化はなかったということです。これを単純計算しますと、1頭から年間2000個近い卵子が採れることになります。するといまの技術で仔牛は一年間に約200頭生まれる計算。牛の繁殖期間は10年、一生で多くて10頭の仔牛を生むのが通常ですから、もう殆ど畜産の革命ですね。

——これまで体内で行われていたことが体外で行われるようになると、こんどは卵子に対する人為的な操作が可能になるというわけですね。

桑山：そうですね。例えば今まで繁殖の長年の夢だった雄と雌の生み分けが技術的にクリアーできるようになっています。胚盤胞ステージの卵から、マイクロマニピレーターという機械で細胞を採り、染色体検査によりxyを判定する方法。また同様に、採取した卵の細胞の一部をPCR法により性別判別し、残りの卵をレシピエントへ移植して、任意の性の産仔を得る方法。これで100%セックスコントロールできます。更に、精子段階で分ける方法もあります。牛の場合、y染色体のほうがxよりDNA量が少なく、3.9%ほど軽いのです。DNAを蛍光色で染めると、3.9%光りが少ない。フローサイトメーターという機械でだーっと精子を流し、その光りの差を見分けます。1時間に20万~40万匹、確率は90~95%です。その精子を用いて体外受精すると、生まれてくる仔牛のセックスコントロールが容易になって来ます。

現在残されている問題はコスト面です。乳牛が欲しい場合は雌だけ、肉になる和牛が欲しいなら成長の速い雄だけを人工授精すればいいのです。次は遺伝形質の応用または利用。その一つがクローン作成技術というものです。この方法は二種類の卵子を使います。ひとつはドナーと言って優秀な遺伝形質をもっているもの。通常8細胞期胚を透明帯から取り出し、酵素をかけて8つのバラバラにします。こんどはもう一方の未成熟卵子の前核を取り去り、ここに左記の卵をくっつけ膜を融合させて、二分割、四分割させてやるのです。そうすると、一頭1000万円もする牛の1個の卵子から、8頭の遺伝的に全く同じなクローン仔牛が生まれることになります。この技術は86年から成功しています。もっと言いますと、1個の卵から8個に分割させ、それが8細胞期になったらまた8個に分割させ、また……というふうに、理論上無限に増殖させることも可能です。現在は、ICMという胚盤胞段階の胎児になっていく細胞から、何千何万のオーダーでクローン用の細胞を増殖させES細胞の利用技術が中心課題になっています。ここまで来るとちょっと怖いですね（笑い）。

——増殖だけでなく、形質の操作も可能ですか。

桑山：牛もいずれは遺伝子地図を解読するようになるでしょう。でも今はまだそこまでは行きません。例えばスーパーカウという牛がいます。これは1年間に2万キロ以上の乳を出します。通常は6千~7千キロですから、約3倍。そこから受精卵をとるだけで十分ですから、遺伝形質の操作までは必要がないという感じです。

それより、いまインターフェロンを作っている大腸菌の代わりに、トランスジェニックにより牛を使えば、牛乳の中にインターフェロンがどんどん出て来る。1頭2万キロ出せば、それで世界中の需要が足りてしまいます。すでに1992年までに血液凝固因子やインスリン様成長因子など、40種類の方法により作り出され、これらの物質を作り出すトランスジェニックアニマルも豚で2万頭以上、牛や羊で5000頭以上作出されています。

LOVE



脳と心

——愛は脳を活性化し育てる(その3)——

松本 元

まつもと・げん

1940年、東京生まれ。東京大学理学部物理学科卒業。通産省工業技術院電子技術総合研究所にて、神経の研究に従事。89年より、同研究所超分子部長、筑波大学教授を併任し、脳の学習・記憶のメカニズムを、そして「人間とは何か」を追及。従来宗教などが果して来た役割について、科学の側からアプローチし、「愛は脳を活性化する」が持論。著書に、『神経興奮の現象と実体』、『脳と学習のメカニズム』、『脳とコンピュータ』など。

愛は脳を活性化し育てる

情動情報に関する快・不快応答は運動系・自律神経系と良く結びついている。不快情報は運動系に不快行動を出力し、身体の硬直などを起こし、自律神経系には不快応答を出力し、血圧上昇などを起こす。情動情報は脳の活性化も調節する。不快情報を得るとイライラして頭が動かないことはよく経験する。

情動情報が脳の活性化のみならず再生にもいかに強く関係しているか、その具体的な例を掲げる。

1988年11月18日の夕方、T市の高校一年生であったN君は帰宅途中自動車と衝突し、意識不明の重体となった。損傷した右脳への手術が施された結果、硬膜外水腫は残るが事故による脳の正中偏位はほぼ消失した。しかし、右大脳半球前頭葉・側頭葉には脳挫傷に伴う遅発性脳内血腫があり脳室内血腫もみられた。そのため、医師は「手術は成功したが、植物人間となる可能性が非常に高い」と家族に説明した。しかし、家族はN君を集中治療室に毎日訪れ、一日の大半をとともに過ごして、語りかけ、足や手を愛撫し続けた。

事故後約一ヶ月経った12月24日、N君の身体が初めてピクリと動き、回復の様子が徐々に見られるようになり、ついに翌年1月中旬に意識を取り戻した。しかしこの頃、右大脳半球には脳萎縮がみられ、これが原因と思われる脳室系の拡大が生じていた。このため、担当医は家族に「意識は戻ったが、左半身は絶対に動かないと思う」と告げた。

ところが、その後の病院での治療・リハビリテーションや温かい看護の成果で、左半身はほぼ正常に動くまでに回復、高校に復学・卒業し、現在はカナダに留学するに至っている。スポーツや勉強にいそしみ、常人と変わらぬ社会生活を送っている様子からは、右脳が萎縮し、脳室系が拡大しているとは思えない。

これらの著しい回復はN君が意識なく集中治療室のベッドに横たわっている間に家族が語りかけて愛撫を続けたことと密接に関係する。なぜなら退院後高校に復学したとき、ま

ったく逆のことが起こったからである。

N君は1990年4月より高校に一年生として復学した。その年の夏休み前に、先生から「君は一生懸命頑張っている様だが、皆についてゆくのは大変そうだね。君のようにハンディキャップを負った子のための学校もあるので、転校を考えてみては」という趣旨のことを言われた。N君はこれを「先生は学校での自分の存在を否定している」と捉えてしまった。これはN君にとって致命的な不快情報であった。その夕方、それまでほとんど正常だった左半身が動かなくなってしまった。不快情報により脳の活性が著しく低下したのである。

そこで、N君と「先生が忠告してくれたのは、決して学校に来て欲しくないとか、無駄だという意味ではなく、むしろ親切心から、君に適した学校を選んだ方が苦しくない向上も早いからという意味ではなかっただろうか」などと話した。そして、先生はN君の心に思いが至らず、傷つけてしまったので、許さなくてはいけないのでは、などと話した。このような会話を交わしているうちに、N君が「先生の気持ちか判って、ゆったりした気分になった」という趣旨のことを言った時、同時に左半身がゆるみ、また元通り自由に動くようになったのである。

情動情報は脳の活性化を調節するのである。情動情報が快(ポジティブ)のとき、脳は活性化され脳の機能構築も促進されて育つ。これに対し、情動情報が不快(ネガティブ)のとき脳は不活性化となり育たない。

情動情報は意欲のレベルも調節する。例えば朝なかなか起きられないことがある。それは、今日起きてこのことをしたい、という意欲がないからである。意欲があれば、脳は活性化され目覚めるものである。

ある情報を得たとき、それを快と捉えるか不快と捉えるかで、脳の活性化はプラスにもマイナスにもなりうる。そしてそれを決めるのは、外部の情報ではなく、その情報を受ける人の心である。私たちが毎日を生き生きと生きるには、どんな情報をも快と捉え、感謝できるよう、心の訓練をすることである。

LOVE

脳科学と聖書の教え

科学と宗教は対立する哲学として、水と油のように決して融合しないものと信じられてきた。しかし、宗教が心のあり方を追及し、人としての生き方を教えてくれ、脳科学が、同じく心のあり方を追及し「人とはなにか」を解明するものであれば、宗教と脳科学は、必ず融合する所がある筈である。ここでは、聖書を脳科学の立場から考察する。

聖書を貫く基本精神は、人がいかにすばらしい創造物であるかということと、人は愛によってはじめて生きることが出来る創造物である、ということだと思われる。旧約聖書創世記1章27節には「神は自分のかたちに人を創造された」とある。霊なる神のかたちに似せて造られた人は霊的存在であり、人として生まれたというだけで、すばらしい存在である、ということこそをそれは端的にあらわしている。また、旧約聖書イザヤ書43章4節には「私(神)の目からあなた(人)は高価で尊い」とある。人は人である限り、どんな人でも神の目から高価で尊いのである。新約聖書ヨハネによる福音書15章16節には、キリストは「あなたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである」とある。このように聖書は、人は神によりすばらしい存在に成長できる可能性をもつものとして造られた、ということ述べている。このことは、人は性善であり、すばらしい自己組織能を秘めているという事と合致する。

人は愛によってはじめて生きられる、ということは聖書のもう一つの基本思想である。人は人との関係で生きられる動物であり、その関係がポジティブであること(愛を受け、授けること)で初めて生き活きと生きられる。新約聖書コリント人への第一の手紙13章4-7節には愛の定義・性質が明確に述べられている。「愛は寛容であり、愛は親切である。愛はねたまず、自慢せず、高慢にならず、礼儀にそむかない。自分の利益を求めず怒らず、受けた悪を気にしない。不正を喜ばず、心理を喜ぶ。愛はすべてを包み、すべてを信じ、すべてを希望し、すべてを耐え忍ぶ。」

「愛は寛容であり、愛は親切である」ということは、まさに人の情動系の基本原理である。人はそのままの自分をそっくり受け入れて貰う(寛容)と、それは人にとって最高の快情報であるので、その人に対し快応答を示す(親切になる)のである。愛が寛容であることの重要性を示すものとして新約聖書ヨハネによる福音書8章1-11節が特に良く知られている。「イエスに言った。『先生、この女は姦淫の場でつかまえられました。モーゼの律法の中で、こういう女を石で打ち殺せと命じましたが、あなたはどう思いますか。』彼らがそう言ったのは、イエスを試して、訴える口実を得るためであった。イエスは彼らに言われた。『あなたがたの中で罪のないものがまずこの女に石を投げつけろがよい』これを聞くと、彼らはひとりひとり出て行き、女は申にいたまま残された。そこでイエスは女に言われた。『女よ、みんなはどこにいるか。あなたを罰する者はいなかったか』女は言った。『主よ、誰もございませぬ』イエスは言われた。『わたしもあなたを罰しない。お

帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように。』」

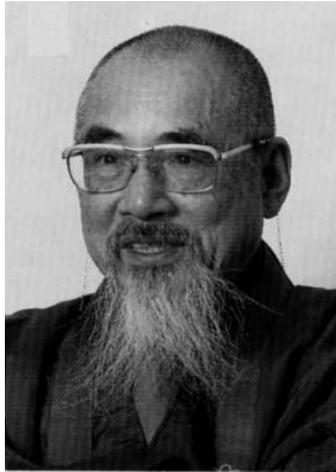
愛は寛容であり、裁かない。罪は改めなくてはならないが、犯した人も人として尊いことは変わらず、愛の人は裁かず、その人を受容する(罪を犯さなければならなかった心を理解する)。人は受容されることによって、快情報を得、受容してくれた人に快応答で答えようとして、イエスの意向「今後はもう罪を犯さないよう」に真心で答えるというのである。これは、まさに性善な自己組織系で、自己組織化がポジティブな方向に時間発展するには、自己がどんな位置にあろうとそれを肯定することが必要十分であることを示している。これにより自己組織化の発展ベクトルは上向きとなり前向きの成長となるのである。

聖書は心の育て方、人生の生き方について多くの指針を示している。新約聖書テサロニケ人への第一の手紙5章18節に「すべての事について感謝しなさい。これがキリスト・イエスにあって神があなた方に求めておられることである」と書かれている。聖書はどんな状況にあっても感謝できる心をもつことが、自分を前向きに肯定的に発展させるための基本要因であると述べている。

それでは、どうしたらどんな状況にあっても感謝できるのか。新約聖書はローマ人への手紙5章3-5節で次のように述べている。「患難さえも喜んでいます。それは患難が忍耐を生みだし、忍耐が練られた品性を生みだし、練られた品性が希望を生みだすと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。」心を鍛えるには平坦な人生ではなく、困難や悲しみと対峙して、乗り越えなくてはならないというのである。

さらに、人は人から受けいれて貰いたいという欲求の為に素晴らしい存在となり得る可能性があるが、この為にまた罪を犯すのである。人からもっと愛されたい、という欲求は、人の評判を気にするあまり、人をかえって恐れることとなり、人と同じような人生を歩むことで安心を得るような結果となる。これでは自己実現ができずかえって苦しむ。人から愛されたいとの欲求が、人頼み人生となり甘えを生む。自分だけが愛されたいという自己中心的な考えにとらわれ、わがままとなる。自己中心的な人は自分の価値の狭い尺度でしか物事を判断できず、他人のもつ自分と異種の価値を認めることができない。この結果、狭量な心となり人生を豊かに過ごすことができない。欲望の強い人はもっともっと愛されたいという欲望が果てしなくなり、本当の満足がなく、従って、心に平安がない。

これらの罪は凡人がすぐ陥り易いものである。科学は心や人を説明するかも知れないが、どのようにこの科学の所産を実際の場に生かすかについては心理学・哲学・宗教に学ぶことが重要であろう。これらは、心理学・哲学・宗教が従来より進めてきたことだからである。従来科学が技術と組み合わせられて人や社会に役立ってきたように、心の科学は心理学・哲学・宗教と融合して人生をさらに豊かにするものと思われる。(完)



二つの転生物語

— 遠藤周作氏の小説を読んで —

秋月 龍珉

あきづき・りょうみん

1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒業。同大学院修了。花園大学教授・埼玉医科大学名誉教授・禅僧
著書に、『秋月龍珉著作集』全15巻、『道元入門』『公案—実践的禅入門』『禅門の異流—一休・正三・盤珪・良寛』『禅仏教とは何か』『世界の禅者—鈴木大拙の生涯』『正法眼蔵を読む』『新大乘—仏教のポストモダン』など多数。共著に八木誠一博士との宗教哲学討論集『親鸞とパウロ』『禅とイエス・キリスト』『ダンマが露わになるとき』など。

もうだいぶ昔のこと、山田無文老師が朝日講堂で講演されたある夕べの話である。法話の後で舞台裏の控え室に老師を訪ねた。かねて老師の熱心な信者だった老婆が先に来ていて、ふと老師に問いかけた。

「老師さん、私ら死んだらどうなりますのじゃ。」

老師は無造作に答えられた。

「死んだらおしまいじゃ。身も心も何にも亡くなる。」

一瞬、老婆は淋しそうな顔をした。

「何にもないんですか。魂もないのですか。」

老婆の様子を見て老師は言われた。

「そうじゃな。自分のためなら、靈魂も何もないがな。菩薩はなあ、後に残って苦しんでいる愛する者の所にもどってきて、何かをしてやらんとな。」

老婆は心からほっとした顔で、師匠の言葉に安心しきったふうだった。

そのころ、晩年の鈴木大拙先生に毎週接していて、大拙先生がよく「極楽は、往ききりにする所ではない。往たらすぐに還ってきて、娑婆で苦しんでいる者の苦しみに代わるのだ」と語られるのを聞いていたので、まったく「君子は同風だな」と感心したものだ。

仏教における輪廻転生の考え方

日本人のほとんどが、仏教は「輪廻」の思想を説く宗教だと誤解している。これを「転生」ともいう。試みに、手元の『仏教辞典』を引いてみると——

りんね【輪廻】梵語「サンサーラ」の漢訳。「流転」とも。インド古来の考え方、人間が生死を繰り返すことをいう(転生)。仏教では、三界(欲界・色界・無色界)・六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上)に生死を繰り返すことをいう。(誠信書房刊『新・仏教辞典』)

生まれ変わりとか、あの世の話など、前近代的と心配したか、この辞典は続けていう——

六道は現代的に考えれば、怒り・貪欲・愚痴・争い・喜悅などの意識の段階を繰り返すのが人間というものであ

るということになる→再生。

さいせい【再生】いったん死んだ者が再びよみがえること。

信仰に入って新しい生活を始めること。あるいは再びこの世に生まれることなどの意に用いられる。インド固有の思想としては「輪廻」思想があるが、仏教はこれを取り入れ、「業」説(カルマの思想)に基づいて仏教独特の輪廻説を立てた。すなわち過去の善悪の「業」(行為)が現在の善悪の果報を招くということである。悪業をなしたものは地獄・餓鬼・畜生などの悪趣(三悪道、修羅を加えて四悪趣)に生まれるが、五戒を守る者はその果報として人間界また天界に再生し、よく「法」(仏陀の教法)を聞き実践する者は「業」を断ち切って、「輪廻界」を離れ、悟りの世界(涅槃)に至ると説く。のちに大乘仏教の時代になると、利他思想を強調し、自利利他を円満した菩薩は、衆生済度のため、種々の形を取って人間界に還って、迷える人々を悟りの世界へ導くと説く(同上)。

別の辞典はまたいう——

るてん【流転】生まれ変わり死に変わりして、六道などの迷いの世界のうちを廻り続けること。「輪廻」に同じ。サンスクリット「プラヴリッティ」原語の意味は“転ずること”で、次の状態に移ることをいう。輪廻してやまないことを「流転門」といい涅槃に趣いて輪廻の世界から解脱することを「還滅門」と称する(『岩波仏教辞典』)。

以上で、だいたい仏教に説く「輪廻」の意味を学ぶことができよう。先の現代的解説についていうと、一生を終えて次の生に生まれ変わるのを「一期の生死」といい、一念一念の心理的段階の生死を「刹那の生死」という。次の大乘的解釈についての仏教語としては、悟って仏陀(覚者)となった者、輪廻の生死(生と死でなく、“迷いの生”の意)を解脱した者は、「業生」(自己の業に引かれての生死)はないが、「願生」(利他の願の故の生死)はある——大死や無文の語参照——ということである。

先に、日本人のほとんどが仏教は「輪廻」の思想を説く宗教だと誤解していると断言した上で、私は仏教——初

FAITH



期(南方)仏教・大乘(北方)仏教——における「輪廻」の考え方を解説してきた。

では、なぜ「誤解」なのか。それは、仏陀釈迦牟尼は悟った直後に、「わが心の解脱は不動である。これが最後の生存である。もはや再生はありえない」と宣言された、と初期経典に伝えているからである。この金口の直説によるかぎり、仏教には「輪廻」はあり得ない。釈尊は輪廻生死を解脱した。仏教にはその意味で、輪廻転生はありえない。ただ初期仏教では、聴衆である大衆が皆な輪廻を信じていたので、それを前提として法を説いたのであり、大乘では生死を解脱したが涅槃に往まらぬ心から、「願生」を説いたのである。いわゆる「無往涅槃」である。その意味は、智慧によりて生死に往せず、慈悲によりて涅槃に往せずということである。亡き恩師鈴木大拙先生は、ここに**仏教の真髄を見ると、常に説かれた。**

遠藤周作氏の小説『深い河』

三年前、遠藤氏がその作品『その夜のコンヤック』(1991年文春文庫)という本を贈ってくれた。遠藤氏はカトリックの信仰を公けに告白している作家である。母君に受け継いだ大事な信仰だが、何となく日本人としての自分にぴったりこないところを感じて、西洋人の洋服を着たキリストに日本人の着物を着せ直したいと努めている人である。私が青年前期に大きな影響を受けた日本組合教会の牧師和田信次先生は、よく言われた。「イエス・キリストはもともと東洋人だ。それがヨーロッパ経由で日本に入ってきたので、日本人にぴったりと来ないところがある。一度イエスから洋服を脱がせて、裸のイエスを見ることだ」と。そうした私は、かねてから遠藤氏の仕事に注目してきた。

この文庫は帯封に、「死の向う側は無……なんて、あなたはまだ信じていますか?」とあり、太字でさらに「既視・幽体離脱・輪廻転生」と記してあって、今日世界的に騒がれている問題を取り上げている。そこには主人公が戦争にかり出されている間に、妹が散歩中に両親と離れて、原宿の辺りで米軍の空爆で死んだ。その妹が自分の孫の男の子として転生した、というような話が書かれている。キリスト教作家として、インド伝来の輪廻思想を真っ向から取り上げたものだ。興味をもって読んだものの、前述のように

仏教の悟りの立場からは輪廻など認めがたいので、どちらかという、私のこの本への感想は冷やかで否定的であった。そのことは昨年出版した小著『誤解だらけの仏教』(柏樹社)の中で、梅原猛氏の『日本人の魂』(光文社カッパホームズ)への批判とともに、すでに考えを述べておいた。

ところが昨年遠藤氏は『深い河』(講談社)という単行本の小説を出版した。近くの書店で聞くと、だいぶ世間で評判になっている小説だという。早速買って、この正月休みに一気に読んだ。久しぶりに深い感銘を受けて小説を読むという体験をした。小説にこんな深い感銘を受けたのは、はるか昔の青年時代以来、たえてない経験だった。

この本の主人公は大津というカトリックの神父である。彼は畏友紀野一義君の言葉でいえば、「生きることの手先な人」の典型みたいな愚直な人間である。学生時代は級友たちに馬鹿にされ、やっと得た恋人には捨てられる。ヨーロッパに逃げて修道院に入って司祭になるが、そこでもみんなに理解されず、異端者扱いで、いっそ東洋の異教・仏教徒のほうが君にはふさわしいとまで言われても、「私はイエスさまに掴まった人間だから」と言って、あくまでも神父として生きる。そして、流れ流れて、インドのヒンドゥ教徒の中で自分なりの生き方をする。

インド人は死ぬと火葬にして骨と灰を聖なる河に流してもらうことを最後の望みとする。貧乏でそれもかなわず、のたれ死にした人々の死骸をかついで火葬に付して骨灰を河に流す、そんなはぐれ神父の生きざまを、遠藤氏は描く。妻が死ぬとき、「私は必ずこの地球のどこかに再生するから、探してね」と言われた夫が、「日本人がインドで転生している」というアメリカのさる協会のニュースをたよりに、インドに来る。その妻の看病をした女が、たまたま大津を捨てた恋人で、これも何となく大津にひかれてインドに来る。まあ、言わば遠藤氏の輪廻転生物語の第二作というわけ。

しかしこの二つの輪廻転生物語は、基本の思想がまったく違う。遠藤氏はこの作品で、はぐれ神父の大津の生きざまに「イエス・キリスト」その人の転生を見ている。これは「転生」というより「復活」である。キリストの再生である。「死んで生きるが禅の道」という。「復活がなければ宗教は空しい」と大拙先生も言われた。インマヌエル・アーメン!

Thought on Pye

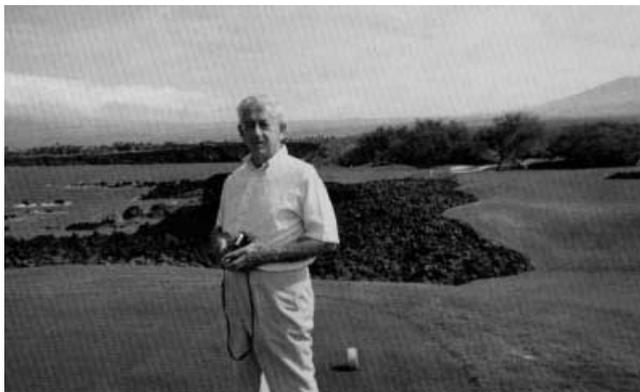
Derek Fair

デレク・フェア

1922年、ニュージーランド生まれ。53年より、東京メディカル・サージカル・クリニックに内科医として勤務。現在、同クリニック院長。77年、医療活動に対し英女王より受勲。趣味は読書、音楽鑑賞、旅行、ゴルフ。

人生哲学は、“This above all, to thine own self be true, And it must follow, as the night the day, Thou canst not then be false to any man.” (Shakespeare/Hamlet)

「ところでいちはん大事なことはな、己に忠実なれ。この一事を守れば、あとは夜が日につづくごとく万事自然に流れだし、他人にたいしても、いやでも忠実にならざるをえなくなる」(大臣ポローニアスによる、息子へのはなむけの言葉。福田恒存訳『ハムレット』第一幕第三場より)。



— Pye に関する考察 —

雑誌や参考書を計画的に買う人はどのくらいいるだろうか。私自身のやり方もでたらめで、いつも書評や広告をもとに選んでいる。が、特に年配の外科医は、“Conn’s Current Therapy”のような、出版年が明記されている最新版を一冊は手元に置いて、時代遅れの印象を避けたほうがいいだろう。

最近私は、長年信頼して来た“Pye’s Surgical Handicraft”の16版(1950年発行)を、新しい22版と取り替えることにした。旧版を捨てる前に、肩脱臼の整復に関するヒポクラテスの方法の記述について、ちょっと比較してみた。

16版のテキストでは、「もしコッヘルの徒手整復を試みても脱臼が整復しなければ、ヒポクラテスがあみだした方法を試みるべきである。すなわち、外科医は両手で手首をつかみ、靴を脱いで患者の上腕と胸の間に足を置く。膝と肘をまっすぐ伸ばして、上体を反らせて牽引する。ゆっくりと患者の腕を外転し、次に足をこの支点にして内転する。コッヘル式もヒポクラテス式も本質的には同じであるが、後者の方がかかる力が大きく、腋窩動脈や神経を傷つけることが少ない。無理に腕を外転するより直接牽引の方が、上腕骨頸の骨折の危険も少ない。」

22版では次のように改訂されている。「もし上記の方法が適当でなかったら、ヒポクラテス式が有効である。患者に全身麻酔をかけ、寝椅子か手術台に仰臥させる。術者は靴を脱ぎ、腕を牽引しながらつま先を使って骨頭を関節に入れる。」この記述では、手技も整復の仕組みの説明も不十分である。正しくは、術者の足の幅がこの支点の働きをし、近位上腕骨をゆっくり外に押し出し、腕の外転に助けられて骨頭が関節窩の縁上に滑り込む。つま先は何んの役目も果さないのである。私は興味を覚えて、“Turek’s Orthopedics”の1977年版を調べてみた。「コッヘル式は最も一般的である。足を腋窩に入れて牽引するヒポクラテス式は、腋窩組織を傷つけることがあるので不適とされるべきである。」

ヒポクラテスの原書は入手不可能なので、引用はできないが、次版のPyeには初期テキストが復元されるよう望みたいものだ。ヒポクラテス式は、術者が足を使う唯一の合法的医療処置として、全ての医学生や救急医の記憶に刻まれているからである。これ以外では、医者たるもの患者の身体のいかなる部分にも足を当ててはならない。

数年前のこと、南支那海を航海する大型タンカーの乗組員が肩を脱臼した。電話して来た船長に、私はPyeで確認しながらヒポクラテス式を説明した。間違いなくコッヘル式よりやさしく説明できる。約一時間後、船長の処置は成功し、タンカーは予定どおりブルネイに向かった。もし船長が徒手整復のためにつま先を使っていたら、進路変更しなければならなかったかもしれない。これは嬉しい経験だった。

ちなみに、ラム酒を麻酔代わりにする、英国の伝統的方法を使ったかどうかは聞かなかった。昔の三段櫂船の漕ぎ手は、肩脱臼がしょっちゅうだったから、ラム酒も必需品だった。

さて、新版をいつ買うかだけでなく、旧版をいつ捨てるかという問題が残されている。典型的な肩脱臼の解剖学的特徴も、その整復の仕組みの原理もヒポクラテス時代から変わっていない。だから私は、1950年版のPyeを取っておかなくてはならない。それに他にも価値ある記述があるかも知れない。ところで旧版の表紙には、“Vel de minimis curat chirurgicus”(どんなに瑣細なことにも外科的治療は可能である。)という一文がある。これも、いつ削除されるのか、また何人が理解しているのか、知りたいものである。(“British Medical Journal”より抜粋)